齋宮

高田　友

夫れ三種ノ神器の消息は人皇の代に入りて、記紀にも暫く其の記載なけれど、十代崇神天皇に至りて、疫病の流行ありしかば、宮中に神を祀るの儀は畏れ多しとて、皇女豐鋤入姫命に託して大和笠縫村に遷し奉る。古事記には神器就中神鏡を「天照大神」と呼び奉る。神鏡には大神の神靈宿りますによりて、すなはち大神にてあらせらる。遷し奉りし時、形代を作らしめ宮中に置きて日々主上の尊崇したまふ所と爲す。令和の御代にてもなほ主上の御寢所の隣室は「劍璽の間」とて、これが寶物を藏ひてあり。神鏡の形代は賢所におはします。神璽の眞正なるは九重におはしまして形代は存せず。また、十一代垂仁天皇の御代には、皇女倭姫命に詔して、安置の場を訪ねしめ、皇女つひに伊勢の五十鈴川のほとりに神域を見出したまふ。ここに社を建てて、神鏡と寶劍の宿り給ふ所と爲す。君豈神洲の神洲たる所以を見給はざらむや。

なほ、眞正の寶劍は當初は伊勢に鎮座ましましけれど、第十二代景行天皇皇子日本武尊（倭建命）、東國に遠征したまひし折、叔母倭姫命より寶劍を授かりて東行したまひ、燒津にて草を薙いで御命を全うしたまひし後、宮津姫に託して熱田神宮に奉納せしにより て、如今に到るまで彼處に納められてあり。

＊劍璽渡御の儀　＊劍璽等承繼の儀

＊踐祚　＊劍璽動座の儀

偖、「伊勢齋宮」とは何ぞや。さは、天照大神に仕へまつる皇女の謂ひにして、豐鋤入姫命を第一代、倭姫命を第二代と見做し、爾後、景行・仲哀・雄略・繼體・欽明・敏達・用明の各天皇の皇女選任せらるるあり。用明天皇皇女は六二二年に退下せられたりき。

六二二年より五十年間、齋宮不在の儀ありしが、天武二年（六七三）、壬申の亂の翌年に至りて、武勲榮芬出來せるは神明照覽のゆゑなりと爲し、卜定の定むる所に循ひて、大伯皇女を齋宮として伊勢に遣はせられたり。時に皇女齡十三歲。

朱鳥元年（六八六）九月、天武天皇崩御、翌月大伯同母弟大津皇子の謀叛露見す。繼母持統天皇の策謀の然らしむる所なりしとぞ傳へらるる。未だ捕縛せらるるに至らざるに、大津、明日香より山を越えて伊勢に御姉を訪ひたまへり。時に大津二十四歲、大伯二十六歲。何條涙せられであるべき、齋宮の伊勢に赴きたまひしより此の日に到るまで十三年に亘りて姉弟相見ゆることつゆなかりき。

事の顚末は萬葉集にしかと記されし所、皇子は死を賜り、皇女は一人永らへて四十二歲に至りき。已哉、皇女の薨じたるは持統天皇崩御と同年（七〇二）なり。

大伯皇女の後、齋宮制度確立せられたり。以前に九人の齋宮ありし儀は既に述べたれど、その後は如何。大伯を第一と數ふれば、南北朝後醍醐天皇皇女（祥子内親王）まで六十七人。豐鋤入姫よりの九人を加へむか、齋宮は前後七十六人と言ふを得む。

「齋宮」は如今「さいぐう」と讀むが常なれど、内宮・外宮と同じく、濁らで「さいくう」とするが本朝言靈の習ひなり。

「齋宮」とは訓ずれば「いつきのみや」、卜定せられたる皇女の伊勢にて住みたまふ宮殿の謂ひにして、内宮を隔つること五里。「齋宮御所」「齋宮寮」と言ふもあり。而して、當初は皇女を指稱せむには「齋王」の語を用ゐたり。齋王の神宮に出仕したまふは年に三度を數ふるのみなりき。

かたや賀茂齋院なるありき。平安初期、第五十二代嵯峨天皇、御兄平城上皇と諍ひたまひ、藥子の亂出來せり。この時に當りて、天皇、賀茂大神に祈りて、「戰ひ利あらば、我が皇女をして、大神に仕へしめむ」と。果然戰捷を得るや才媛の譽れ高き有智子内親王を卜定して、「上賀茂神社（賀茂別雷神社）」と「下鴨神社（賀茂御祖神社）」に奉仕せしめたまふ。

皇女の宮居は紫野（船岡山・大德寺近邊）にて、名を本院（齋院／齋院御所／紫野齋院）とこそはいひけれ。兩賀茂神社を隔つること大略五里なるは伊勢に倣へるか。

皇女の館を伊勢にては「齋宮」、賀茂にては「齋院」と稱へ、皇女當人の儀はいづれにても「齋王」と申し上げたれど、混同を避けむがために、伊勢の齋王を齋宮、賀茂の齋王を齋院と、御所の名を取りて呼び奉るにぞ至りける。

伊勢齋王の中にて汎く知らるるは、聖武天皇皇女にして光仁天皇皇后なりし井上内親王およびその皇女たる酒人内親王。井上内親王は十一歳にて伊勢へ下向し、十七年の後に退下あらせらる。豐鋤入姫より數へて十八代目の齋宮なりき。光仁天皇の爲に立后あらせられたれど、天皇呪詛の咎を以て、所生の皇嗣他戸親王とともに誅せられしとなむ。その後立太子せられたる桓武天皇の謀りたる所なるべしとぞ傳へらるる。

また酒人内親王は二十二代なりしが、母と弟に連坐して退下し、後に仇敵桓武天皇の妃と成りて内親王を生む。日本後紀に左の如き記事あり。

《容貌殊麗。柔質窈窕。（中略）（桓武天皇の）寵幸方盛。（中略）性倨傲にして、情操修まらず。天皇禁ぜずして、その欲する所に任す。婬行（あるいは婬行）いよいよ増して、自制する事能はず》

賀茂齋院にて名高きは、本朝無雙の女流歌人・式子内親王なり。十一歳にて卜定、十年間奉仕せらる。就中退下の後に回顧して詠みたまひし左の歌は人口に膾炙す。

忘れめや葵を草に引き結び
　　假寝の野邊の露のあけぼの

（令和六年七月十日受附）